

第40回日本大学理工学部図書館公開講座 質疑応答

	年代・身分	在住	質問	回答
1	60代・会社員	千葉県	脆弱な土地への人口集中がリスクを拡大するという意味では、江戸時代の地図を見て、人が住んでいなかった場所は避けるべきだという考えは、今も基本的考えとして信じてよいものでしょうか？	その地域にリスクを覚悟で住むかどうかというのは、日本国憲法で定められた権利の問題に帰着します。例えば、ニューヨークのマンハッタン島では、バッファゾーンを川沿いに設け、投資をして防潮堤を作り、リスク回避するという選択をした。それだけの価値がその街にはあるからお金をかけてもいい、という判断。日本の場合、例えば0メートル地帯と呼ばれる隅田川とか荒川の周辺でも、同じように防潮堤に非常にコストをかけて都市を守っています。それだけの資産、価値があるからコストをかけてやる意義があるという捉え方ですが、居住地域としては本当にそれで適切か？については、住まわれる方の判断だと思います。そこで働くなら意義があると思いますが、住むのが本当にリスクの回避とか価値っていう意味でバランスとして正しいのかどうかをぜひお考えいただきたい。
2	30代・会社員	神奈川県	「津波でんでんこ」の考え方について、全体で7割反対とのことですが年代別では賛成／反対の割合が異なっていたりするのでしょうか。例えば”家族などの救助をすべきだから反対”と考える方々の年代は、自分が家族（子供または高齢の親・祖父母など）を助ける側の20～50代くらいに多いような気がします。逆に（私も被災者で現地の方々と話をすることが何度もありますが）高齢の方々は、自分を助けるのはいいから子供たちは一秒でも早く逃げてくれ、というお考えの方もいるように思えます。	新聞社のアンケート結果と記憶していますが、年齢構成までは確認できていませんので、今日はお答えできません。申し訳ありません。 (後日追加) そのように考えるのは自然な事ですが、津波でんでんこは、それではダメだ、という津波常習地域で到達した論理的な答え、経験則なのです。
3	10代・大学生	千葉県	避難をする際の手段は徒歩が望ましいですか。	徒歩が望ましいです。東日本震災の時にも車で避難して巻き込まれた方、多数おられます。特に仙台港の辺りでは、車で避難中に渋滞し、津波が来たというシチュエーションが多々見られます。道路が無事かどうかもわかりませんし、交通障害、交通集中みたいなものも当然あり得るので基本原則は徒歩。ただし、福島とか岩手の一部地域では、例えば漁港で働いている方たちは、車で避難できるように避難ルートを整備してるケースもあります。それはあくまで健康者の方、そこでリスクを覚悟でやられている方たちの選択肢なんだと思いますので、是非皆さんは徒歩で逃げられるようにお考えいただきたいと思います。
4	20代・大学生	埼玉県	質問 Google Earthでの防災散歩は効果的でしょうか？	Google Earthで最短ルートはいくつか出てきますが、それが正解かどうかは現地に行ってみないとわかりません。現地に行く前の予備検討にGoogle Earthなどを使うというのには有り。いろいろなコンテンツを使って、それを現地で自分の目で確かめるという段取りでやっていただければ有効活用できるかと思います。
5	20代・大学生	東京都	日本大学理工学部土木工学科の学生なのですが、他学科の教授からみた土木工学科の役割などを教えていただきたいです。	(後日回答) 小生は土木系の民間コンサルタントで30年余り海岸保全業務に従事していました。市民の安全・安心を守るのが土木技術者の使命ですが、安全や安心は、自然条件や地域特性、地域社会や人間の価値観に応じて、あるべき姿が異なります。土木工学科では、これらを科学的かつ客観的に、あらゆる角度から最適解を見出すための技術を学ぶ事が重要と思います。特に防災や減災を考える場合、時には人為的要因や心理、行動特性も含め、まちづくりのリスクを評価する必要があります。
6	来場者		貴重なお話をありがとうございました。私も東北地方太平洋沖地震において、前例がなかった想定外だったという言葉ですと逃げてきたんですけど、ただ実際に原子力発電所をみますと、東北電力の「女川」はあの高い所につくっている。だけど東京電力の「福島」はそこまで想定しないで低いところに作った。そして貞観地震の古いあんな大きな地震があったじゃないか。というところに落ち着いたんですよね。ところが、最近の南海地震の想定をみますと、静岡県・神奈川県沿岸部の津波タワーが極めて低いんですよ。全て江戸時代の東南海・南海地震の津波しか想定してなくて、その前にあった明応地震の数メートルの津波を全く考えていない。それを全く考えてないで、愛知県も静岡県も神奈川県もずっと震災対策・津波対策を進めている。その辺について先生の御意見を伺えればとご質問させていただきました。	いろいろな機関が災害リスクについて取り組んでいるのは間違いないですが、社会の脆弱性やリスクの問題ととらえる必要があると思います。人間のやることは100%安全はあり得ない前提で考えなければいけない。原発にしろ、津波対策にしろ、それで本当に命が守れるかどうかを、他人任せにすることは良くないと言うのが持論です。避難タワーが想定より低いのではないかとすることは、まさにその地域でしっかり議論する話で、たぶん議論が尽くせていないのだと思います。自分の命は自分で守る自己責任に軸足を置くように、思考を切り替えてください。
7	来場者		貴重なお話をありがとうございました。たくさん気づきがありました。私は建築の設計をしてまして、構造設計をやっているんですけども近々仙台の方の地域で設計をする機会がありそうなのがありまして、とはいっても建築するとなると予算も限られてますし、建物側としてハード面のできることでって限られているかと思ってます。とは言え、津波に対しては何かしなくてはいけないという中で建物の機能的なところだけではなくて御施主様とさっきの「防災さんぽ」とかはヒントになる気がしたんですけど、設計者として御施主様に何かができるようなことってあれば教えていただきたいなと思います。	施主様と設計者という立場になってしまうと中々言いづらいこともあろうかと思いますが、リスクと脆弱性を考えると、ドライに言えば、本当にそこに住むべきですか？そこで建物を立てる生業（なりわい）が必要ですか？リスクを担保できますか？コストをかけてまでリスク回避をしなくてはいけない理由が本当にあるか？という哲学的な話だと思います。極論を言えば、もっと（場所が）高い所に住めないんですか？という話。設計者の立場としては、コストをいくらかければ安全が担保できるかという天秤になるので、設計提案のコストがリスク回避に役立つかどうかを一度考えて欲しい。という風に投げかけてみてはいかがですか？そのために、「防災さんぽ」とかリスク分析をやってみてください。その上で提案をのむなら、もちろん施主様のおっしゃるとおり設計しますが、という具合です。